横浜市立 港中学校　　学校評価報告書　　（ 令和 元 ~ 3 年度 ）

令和 元 年度

重点取組分野	具体的取組	自己評価結果	総括
生きてはたらく知	①校内研修や小中一貫教育推進ブロック授業研究会において積極的に授業を公開し、個に応じた指導の充実を目指す。 ②教科横断的な捉えを意識し、教科間の連携力を高める。	区教育研究会の研究授業や、指導主事による通年訪問、小中ブロック授業研究などの機会を活かし、積極的に「主体的対話的で深い学び」の創出を目指す取組を行った。 教科横断的な教材の捉え方についての研究を、計画的に推進することを決定した。	B
豊かな心	①地域特性を活用し、国際感覚の醸成を図る。（中華学院への協力等） ②修学旅行事前学習の改善など、平和教育の充実を図る。	JICAからの体験入学受け入れと、上海の中学校との交流を両立させる仕組みを整えた。 修学旅行の事前学習に被爆体験者の講話を取り入れ、平和学習の充実を図った。 特別の教科「道徳」の評価方法を研究することで授業改善を図っている。	B
健やかな体	①小学校との連携により食教育の充実を目指す。 ②部活動の取組をさらに合理的科学的なものに改善する。	テーマの変更により、食教育ではなく睡眠の大切さについて、保健委員会が中心となって全校体制で学習した。専門家による指導もあり、充実したものとなった。 部活動の取組では試行錯誤もあるが、改善しようとする意識は高まっている。	B
生徒指導	①学級担任の学級経営力向上、学年主任の学年経営力向上を目指すために、カウンセリング及びコーチングに関する理解を深める。 ②教育相談日の設定や週1回開催の学年連絡会によって、生徒一人ひとりの情報を共有する。	週1回開催の学年連絡会は、いじめ防止対策委員会を兼ね、いじめの防止及び解決に向けての共通理解を得る場となっている。 警察・児童相談所・学校教育事務所・区役所等関係諸機関との連携を大切にしている。	B
特別支援教育	①支援を要する生徒に関する共通理解を深め、保護者との連携に努める。 ②コーディネーターを中心として、組織的に対応できるよう研究を進める。	校内特別支援教育委員会を開催し、コーディネーターと学年職員が連携することによって、生徒本人および保護者の理解を得ながら計画的な取り出しによる特別支援が実現している。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校運営協議会が元街小学校との共同開催であるという特徴を活かし、義務教育9年間を見通したうえでの地域の協力を仰ぐ。 ②北方小学校との連携（学校運営協議会の在り方）を検討する。	学校運営協議会における報告や意見交換によって、小学校の教育方針や具体的な活動を理解することができている。また、地域の方々から直接ご意見をいただくことで、反省や修正をすべきことが明確になっている。	A
教育環境整備	①通学時の荷物について軽減化を図るため、生徒用教室ロッカーの交換を進める。 ②通学時の荷物について軽減化を図るため、学校指定通学用バッグの妥当性を検討する。	消費税増税に間に合うよう、通学用カバンについての規定を変更した。 教室ロッカーの大型化も計画的に進めている。 雨漏りが数か所で激しくなったため、教育委員会の協力を求め、応急的な処置を施した。	B
いじめへの対応	①年間を通じて職員会議の際には必ずいじめ防止研修を行い、職員のいじめに対する意識を高める。 ②毎週1回開催するいじめ防止対策委員会において、常に情報を更新しながら共有する。	毎朝の職員打ち合わせ時には必ず生徒指導報告を行い、いじめに関する情報を全職員で共有している。また週1回のいじめ防止対策委員会では、事案解決に向けての取組やいじめアンケートの結果について分析・検証している。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①校内研修の計画的な実施により、カリキュラムマネジメント力や危機管理対応能力などの向上を目指す。 ②関係機関と連携する機会が多いので、それらを有効活用する。 ③持続可能な学校行事の在り方を研究することで、働き方改革を推進する。	昨年度に引き続き、中堅職員が企画運営をする職員研修を実施し、危機管理対応や特別支援教育に関する知識の向上を図った。 働き方改革に寄与するため、学校行事全体の見直しを継続するとともに、校内学校運営組織の再構築を視野に入れて研究を始めた。	B

ブロック内評価後の気付き	学校評価アンケートにおける保護者への質問内容に対し、保護者からは「実際にはわからないことや知らないことを質問されても答えようがない。」という意見が多く寄せられている現状がある。 授業参観を実施しても、参観する保護者が少ない。あるいは、参観者が多いときは教室に入りきれず、廊下で雑談が始まってしまう。 このような現状が、小中共通の課題であることが分かった。改善のために協力して取り組みたい。
学校関係者評価	・生徒たちの日ごろの挨拶は気持ちよくできている。 ・学校生活全般に落ち着いた様子が見られるので、これからも努力してほしい。 ・地域の特色を知るための取組はとても良いことなので、是非さらに充実させてほしい。 ・体育祭の種目には工夫する余地がありそうだ。（防災教育と関連付けるなど）
中期取組目標振り返り	・新教育課程の完全実施に向けて、教員の働き方改革を念頭に置きながら、指導内容と活動方法の見直し及び再構築の第一歩を踏み出すことができた。 ・複雑かつ深刻化する生活指導上の課題に対し、ある程度組織的に取り組める体制が見えてきた。

令和 2 年度

重点取組分野	具体的取組	自己評価結果	総括
生きてはたらく知	①継続的な授業改善を目指し、校内研修・区教育研究会・指導主事通年訪問・小中ブロック授業研等を有効活用し、新教育課程の完全実施に備える。 ②各教科会で他教科と関連している教材を研究し、履修時期や指導内容の計画を作成する。	4月、5月の2か月間に加え、6月の分散登校期間に失われた授業時数を、計画的に回復すべく全員で取り組むことができた。 各教科間の情報交換を定期的に実施し、新教育課程実施準備を確実に行うことができた。	B
豊かな心	①差別や偏見に関する知識を正しく身につけることが出来るよう、すべての教育活動の中で啓発に努める。 ②地域特性を活かし、国際感覚の醸成を図る。 ③他者に対する思いやりの心を育むため、考え議論する道徳の授業を目指す。	人権教育担当が道徳の校内研究授業を実施した。国際教室担当と連携しながら、一人ひとりを大切にする授業のモデルを示すことができた。 コロナ禍の偏見を、マスコミが取り上げる地域であるため、意識を高めて取り組んでいる。	B
健やかな体	①生徒がゲーム障害・ネット依存に陥らないよう、外部諸調査結果や本校の実態調査を参考に研究と指導を進める。 ②生徒自身が理解できるような部活動の合理的科学的な取組を推進する。	スマホ依存の弊害については生徒会保健委員会が研究し、その成果を全校生徒に発信した。 食教育に関して、学区内2校の小学校の協力を得て、掲示物が充実した。 コロナ対策を確実に実践した。	B
生徒指導	①朝の職員打ち合わせでは前日の事案を共有し、週1回の定期学年連絡会では主たる事案への対応について議論し、全体職員会議では経過や結果や見通しを共通理解する。 ②関係諸機関との連携を躊躇せずに実施する。	コロナ禍において、生徒の命を守るという重大な使命を教職員全体で再認識し、生徒一人ひとりに寄り添える体制作りに取り組んだ。 警察や児童相談所との連携を従来よりも密にすることが求められ、実践することができた。	B
特別支援教育	支援が必要な生徒への共通理解をもとに、各教科の教員が「入り込み」や「取り出し」をすることによって、教科の専門性を活かしながら関われるような仕組みを創出する。	特別支援教育コーディネーターを中心として、特別支援教室の運営を全校体制で行った。生徒や保護者のニーズに応えることができるようになったが、具体的な指導内容についての工夫は不十分であった。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校運営協議会が元街小学校との共同開催であることの強みを活かし、義務教育9年間を見通しながら地域からの協力を仰ぐ。 ②部活動による地域貢献が継続できるよう努力する。	コロナの影響で、1回目が中止となり、2, 3回目も紙面による報告となった。しかし、深いご理解をいただき、学校としては大変勇気づけていただいた。	A
教育環境整備	①生徒の安全確保を最優先するため、応急的な処置に止まっている修繕を急ぐ。 ②教室ロッカーの改善工事を継続する。 ③体育祭における熱中症対策を推進する。	教室ロッカーの改善工事は完了した。生徒の荷物軽減化を実現することができた。 体育館のバスケットゴールを交換し、耐震性・安全性を高めた。 消毒作業を着実に実施している。	B
	b8		
いじめへの対応	①年間を通じて職員会議の際にはいじめ防止研修を実施し、職員のいじめに対する意識を高める。 ②毎週1回開催するいじめ防止対策委員会において、常に情報を更新しながら分析し、より良い解決に向けての取組を示す。	教職員による早期発見に加え、周囲の生徒の気付きによって、いじめられている生徒自身がいじめられていることを自覚する前に、いじめている側を指導することができた。 悪口やからかいは根絶できていない。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①校内研修の計画的な実施により、カリキュラムマネジメント力や危機管理対応能力などの向上を目指す。 ②「働き方改革」の推進を視野に入れながら、学校行事の在り方や、日常の学校運営に関わる組織について研究を深める。	若手教職員がチームリーダーとして活躍する場面を設定し、自覚を高めることができた。 コロナ対応で、報告・連絡・相談の頻度が非常に高くなったため、多くの教職員の危機管理対応能力が向上した。	B

ブロック内評価後の気付き	コロナ禍での運動会・体育祭や旅行的行事などの対応について、適宜情報交換をしながら取り組むことができた。そのため、ほとんど混乱することがなく、保護者や地域からの理解が得られた。また、コロナ禍であっても、 小学校から中学校への生活指導的な連携は途絶えずにできた。
学校関係者評価	学校運営協議会委員に学校の現状を書面でお伝えした。あたたかい励ましの言葉を多数いただいた。コロナ収束を待って開催する予定である。
中期取組目標振り返り	・コロナの影響を大きく受けてしまっている家庭の中で、苦しんでいる生徒が多い。通常の学校運営と並行して特別な対応が求められているが、全教職員の協力のもと、各目標を見据えて取り組むことができた。 ・臨時休校期間中に実施された授業動画配信に関して、本校から英語科・技術科・道徳の3名の教員が収録に参加した。その際の教材研究等授業準備に向かう姿が、他の教員に刺激を与えていた。

令和 3 年度

重点取組分野	具体的取組	自己評価結果	総括
生きてはたらく知	①継続的な授業改善を目指し、校内研修・区教育研究会・指導主事通年訪問・小中ブロック授業研等を有効活用し、新教育課程の完全実施に備える。 ②各教科会で他教科と関連している教材を研究し、履修時期や指導内容の計画を作成する。	夏季休業の延長および9月の分散登校期間により損じた授業時数を、2学期の間40分授業で最大7時間目まで授業を行うことで概ね回復することができた。 各教科間の情報交換を適時行い、新教育課程の実施に伴う変化への対応を図った。	B
豊かな心	①差別や偏見に関する知識を正しく身につけるよう、すべての教育活動の中で啓発に努める。 ②地域特性を活かし、国際感覚の醸成を図る。 ③他者に対する思いやりの心を育むため、考え議論する道徳の授業を目指す。	社会の授業や道徳の授業を通して世界や日本にある差別の歴史や実情を伝えることができた。 コロナ禍や国際情勢に敏感な地域であるため、さまざまな国の人が共存する社会であるという意識を高めて取り組んでいきたい。	B
健やかな体	①生徒がゲーム障害・ネット依存に陥らないよう、外部諸調査結果や本校の実態調査を参考に研究と指導を進める。 ②生徒自身が理解できるような部活動の合理的科学的な取組を推進する。	スマホ依存の弊害については、保健だよりを通して全校生徒に発信した。 食教育に関して、学区内2校の小学校栄養教諭や学校薬剤師、家庭科教諭と連携し、骨密度測定と骨密度を高める栄養・運動について授業を行った。 コロナ対策を確実に実践した。	B
生徒指導	①朝の職員打ち合わせでは前日の事案を共有し、週1回の定期学年連絡会では主たる事案への対応について議論し、全体職員会議では経過や結果や見通しを共通理解する。 ②関係諸機関との連携を躊躇せずに実施する。	コロナ禍が続く中で、それに伴う偏見やいじめが無いように教師間、学年間での連携を特に強めて、日々の教育活動に務めた。 警察や児童相談所と関わる機会が多くなり、より情報共有を深めて、生徒が安心して学校生活を送ることができるように務めた。	B
特別支援教育	支援が必要な生徒への共通理解をもとに、各教科の教員が「入り込み」や「取り出し」をすることによって、教科の専門性を活かしながら関われるような仕組みを創出する。	特別支援教室では、学習面での支援を必要としている生徒に対して、教科担当が具体的な指導を行うことができた。今後は、長期的なスパンで支援ができるよう、より一層の体制を整えていきたい。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校運営協議会が元街小学校との共同開催であることの強みを活かし、義務教育9年間を見通しながら地域からの協力を仰ぐ。 ②部活動による地域貢献が継続できるよう努力する。	昨年度に続きコロナ禍のため、1, 2回目を中止とし、3回目については開催を目指していたが、第6波の影響で書面での報告となった。 今後とも、可能な限り地域との連携を図りながら学校運営を検討していきたい。	B
教育環境整備	①生徒の安全確保を最優先するため、応急的な処置に止まっている修繕を急ぐ。 ②教室ロッカーの改善工事を継続する。 ③体育祭における熱中症対策を推進する。	定期的に学校安全点検を行い、適時修繕をした。 教室ロッカーの改善工事が完了した。 夏に外壁工事を行い、安全性を高めた。 熱中症対策として、冷風機等の設備を整えた。	B
	c8		
いじめへの対応	①年間を通じて職員会議の際にはいじめ防止研修を実施し、職員のいじめに対する意識を高める。 ②毎週1回開催するいじめ防止対策委員会において、常に情報を更新しながら分析し、より良い解決に向けての取組を示す。	年二回の生活アンケートを全校で実施した。教職員が周囲をよく観察し、生徒の様子を観察し、トラブルを未然に防ぐことに努めた。 週一回の会議では、各学年の情報を共有し、校長の指導の下、組織的な対応を行った。	B
人材育成・組織運営（働き方改革）	①校内研修の計画的な実施により、カリキュラムマネジメント力や危機管理対応能力などの向上を目指す。 ②「働き方改革」の推進を視野に入れながら、学校行事の在り方や、日常の学校運営に関わる組織について研究を深める。	危機管理について力をつける必要性を感じている。休日の連絡体制をはじめ、緊急時の対応について混乱が見られたことは事実であり、適切な対応を行う体制の整備は続けていかなければならない。働き方改革については、業務の集中を減らすため、中心となる役割を一つにし、負担軽減を図るとともに集団指導体制を改善	B

ブロック内評価後の気付き	今年度もコロナ禍のため小中合同授業研究会が予定通り開催できなかった。中学校の授業研究会では、児童生徒指導に関する情報交換や互いの校種への質問なども出し合うことができた。外国籍児童・生徒や児童保護施設から通う生徒が多い本校の特色ある指導として、次の取り組みを次年度も実施したい。 ・小中9年間の学びの系統性、子どもの成長を意識した授業づくりを行う。 ・学習資料やICTを活用して主体的に学ぶ力を高め、思考判断表現の力の育成を図る。
学校関係者評価	コロナ禍のため、今年度も学校の教育活動が制限を受ける中で、紙面による開催となった。教育活動が制限される中ではあるが、学校の教育活動に対し、あたたかい言葉をいただいている。
中期取組目標振り返り	コロナ禍で教育活動の制限が多い3年間になってしまった。言語活動に制限がかかり、新たな教育課程の実施に際して生徒の主体的な活動に結びつけることが難しい状況となった。 本校の最も大きな課題は、生徒の自己有用感と自尊感情の低さである。この課題に真摯に向き合い、自己有用感を高めるための教育活動として何を行っていくかを考え、実践していかなければならない。今後もコロナ禍が続く状況も考えられるが、生徒が主体的に学び、自尊感情高く、意欲的に学び、活動に取り組む学校とするために、教職員が一丸となり、笑顔で共に過ごす信頼関係を大切にした学